

台湾鄭氏 - 中国南部 - 東南アジアを結ぶ諸条件と オランダ東インド会社

久礼克季（立教大学アジア地域研究所 特任研究員）

上田：それでは続きまして、同じくアジア地域研究所の特任研究員の久礼さんをお願いしたいと思います。久礼さんは立教大学で博士号を取られておられて、近世におけるジャワ北岸の華人の活動という形で研究をしております。オランダ語の資料を主に用いながら、適宜、漢文資料対応させて、立体的に研究されております。

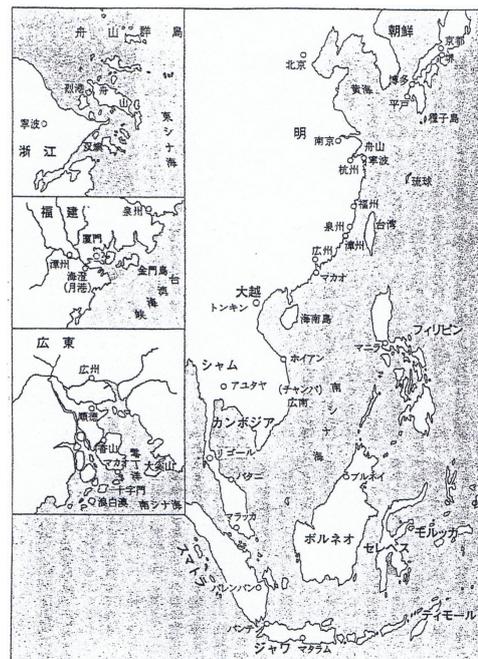
先ほどの宮田さん、久礼さん、2人とも、アジア地域研究所で行っています海域学の研究の方でリサーチアシスタントとしてそれぞれお仕事をされています。それでは久礼さん、お願いします。

久礼：ご紹介いただきました、立教大学アジア地域研究所、特任研究員の久礼克季と申します。本日のシンポジウムは、貿易陶磁や考古学を中心としていますが、私は文献史学の方から、説明をさせていただこうと考えております。

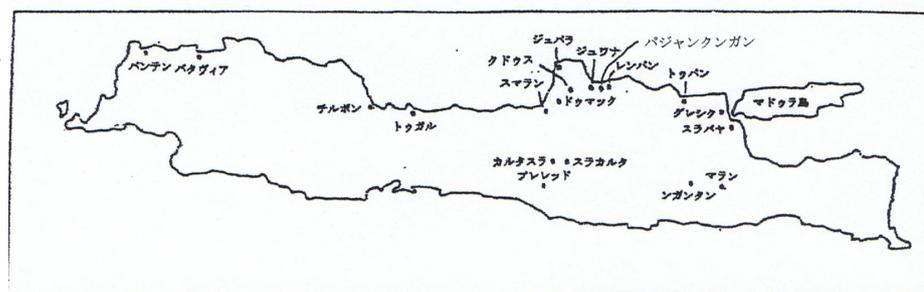
上田先生からご紹介いただきましたように、私は、そもそも近世におけるジャワ北岸地域の華人の活動について、研究を進めております。その中で、オランダ語の史料を見ていきますと、このジャワ北岸地域で17世紀後半に鄭氏の華人が活動を行い、彼らがバンテン王国とも関係を持ちながら活動していったことがわかり、興味を持って調べた結果、本日の報告に至りました。

最初に、ジャワ北岸地域の場所について説明します。ジャワ島、マドゥラ島の地図を用意しました（地図2）。この北岸地域は、具体的にいうと中部ジャワの真ん中あたりにあるトゥガルと書いてあるところから東の北岸、すなわち、独立した王権が存在したバンテンやチルボン、またオランダ東インド会社〔オランダ語では連合東インド会社<Vereenigde Oostindische Compagnie>と称し、略してVOCという〕が拠点を置いたバタヴィアを除く、マタラム王国の支配下にあった北岸の地域をジャワ北岸地域として説明をしていきます。

先ほども申したように、私の研究はジャワ島を中心としています。鄭氏に関する他の研究には、ジャワ島以外に関して網羅する非常に優れたものがあるため、説明するのはジャワ島ということにさせていただきます。



地図1 南シナ海貿易の拠点
上田（2005）より 一部報告者加筆



地図2 ジャワ島、マドゥラ島

1. はじめに

1-1. 台湾鄭氏

台湾鄭氏、これは実際には台湾を拠点に置いた鄭氏勢力を指しますが、ここでは少し前、いわゆる鄭成功が台湾を占領する以前の鄭芝龍（鄭一官）の時代についても述べていきます。

鄭氏勢力は、16世紀後半のシナ海域において有力な海洋商人であった李旦という人物が率いていた海洋商人の集団を、17世紀前半に鄭成功の父親である鄭芝龍が引き継いだことで、台頭します。その鄭芝龍の息子である鄭成功は、1662年に、当時オランダ東インド会社の拠点であったゼーランディア城を最終的に陥落させて、台湾を占領しました。以後、鄭成功の息子である鄭経や彼の息子である鄭克塽まで続く、台湾鄭氏政権を形成していきます。

台湾鄭氏は、明清交代で大陸を支配下に置いた清朝や、鄭成功によって台湾を追われたオランダ東インド会社と対抗しながら、台湾や近接する厦門などを拠点に、日本や中国、東南アジアの各地と貿易を展開し、最終的に清朝に降伏する1683年まで活発に活動していきました。

ではその中で、台湾鄭氏は、台湾や中国南部、東南アジアにおいてどのような活動を行っていたのか。また、特にオランダ東インド会社は、台湾鄭氏に対してどういう対応をしていたのか。これらが、私の問題意識としてありました。

1-2. 台湾鄭氏に関する先行研究

先行研究について、一つには、林田先生によって、鄭氏による台湾占領や同島の統治、また鄭氏と清朝との関係が論じられ、まとめられたものがあります。

貿易面では、2013年に鄭維中<Cheng Wei-chung>が、中国沿岸を中心に台湾や東南アジアをも含めた、網羅的な研究を発表しています。この研究では、鄭氏台頭以前の16世紀後半以降に中国沿岸で活発に活動した中国の海洋商人から、鄭芝龍、鄭成功、鄭経を経て、鄭克塽まで至る時代について論じています。その中で同氏は、鄭氏が台湾に拠点を置き、日本の「鎖国」や清朝の海禁令を利用しながら制海権を取り、最終的に中国－日本－東南アジア、特に大陸部で活発に貿易を展開したと指摘します。

また、上田先生の研究もあります。上田先生は、『シナ海域蜃気楼王国の興亡』において14世紀から17世紀のシナ海世界各地で展開した海上勢力に関する議論を行う中で、鄭成功についても言及し、鄭氏の貿易組織や諜報活動と結びついた貿易活動、オランダとの抗争などについて述べています。

考古学からは、坂井先生が論じており、西ジャワにあるバンテンの遺跡から大量に発掘された肥前陶磁の状況から、当時、肥前陶磁の中継センターの一つであったバンテンにおいて、これらを運んできたのは台湾鄭氏であったと指摘しています。

1-3. 問題点と本報告の目的

こうした先行研究を通じて、特に歴史学からは、鄭氏による台湾占領や同島の統治、清朝およびオランダ東インド会社との外交、また日本や中国、東南アジア、特に大陸部東南アジアでの貿易における台湾鄭氏の活動が、それぞれ明らかになっています。

ただ、文献史料から明らかにされていることは、一方で坂井先生が提示する考古学的成果と完全には一致していません。鄭維中は、鄭氏がバンテンで活動していたことに若干触れていますが、それも1670年代に活動したと指摘するのみで、それ以上の説明をしていません。

加えて先行研究では、鄭氏の活動に対するオランダ東インド会社の対応にも触れていません。台湾鄭氏は、バンテンだけでなく、マタラム王国の影響下にあったジャワ北岸地域でも活動していました。では、なぜ鄭氏はジャワ島に行ったのか。また、ジャワ島での鄭氏の活動について、バタヴィアを拠点にジャワ島で活動していたオランダ東インド会社は、どのような対応をしたのか。これらが明らかにされていないという問題点があります。

こうしたことから、本報告は、鄭氏勢力による日本―中国―東南アジア地域での活動のうち、特にジャワ島における活動や、それに対するオランダ東インド会社の対応について、それぞれ明らかにすることを目的とします。

史料は、オランダ東インド会社文書、その中でも、各地の東インド会社商館からバタヴィアへ宛てた『通信文書』<Overgekomen Brieven en Papieren>、『バタヴィア城日誌』<Dagh-register Batavia>、『一般政務報告書』<Generale Missiven>、デ・ヨンゲ<de Jonge>の著作*De Opkomst van het Nederlandsch Gezag in Oost-Indie*にある『一般政務報告書』の記事を中心に、用いていきます。

2. 台湾鄭氏史概要

2-1. 前史

まずは、台湾鄭氏の概要について、述べていきます。最初に、先ほど申し上げた鄭芝龍につながる前史として、李旦という人物を取り上げます。

1567年の明朝による海禁解除以降、華人商人の活動が活発化する中、彼らの間で組織化をしてより有利に貿易を展開していこうとする動きが始まります。こうした中、海洋商人の主要人物であった李旦は、最初はマニラ、その後平戸に拠点を置いて、北部ベトナムのトンキンやフィリピンのルソン島などとの貿易や、台湾への朱印船派遣を行いました。また、彼は、中国本土と台湾を航行する船舶を攻撃して、台湾を経由する貿易ルートの独占を図っていきました。

この李旦についた人物が、鄭芝龍となります。李旦に信任されて義理の親子関係を結んだ鄭芝龍は、1625年に李旦が亡くなると、その資産のほとんどを入手して後継者となります。彼は、福建の沿岸地域において武力的な活動を展開することで競争相手を自らの下に吸収し、1628年には厦門を占領しました。

こうした鄭芝龍の活動に対して、明朝は、海上勢力の統括において非常に使えると考え、彼に「海防遊撃」という名の沿岸警備の役職を与えました。その後、明清交代が起こり、1645年に清朝が南京にあった明の亡命政権をつぶすと、鄭芝龍は、明朝の皇族である朱聿鍵を擁立して隆武帝としました。しかし、隆武帝が1646年に捕らえられ死去すると、鄭芝龍は清朝に投降します。投降後の鄭芝龍は、鄭成功との交渉役を任せられますが、1662年に鄭成功が台湾を占領すると、清朝によって処刑されてしまいます。

2-2. 鄭成功（鄭森）時代

この後、台湾に関係していく勢力になっていくのが、鄭成功であります。最初、鄭森（ていしん）と呼ばれた彼は、1623年に鄭芝龍の息子として平戸で生まれ、1630年に科挙の準備をするため福建に戻りました。その後、明清交代が起こると、鄭森は、1645年に隆武帝から明朝の皇室と同じ「朱」という姓を与えられ、名も「成功」とします。

他方で、明朝の皇帝と同じ姓を対外的に用いることがはばかれたことから、自らは、王朝の姓である「国姓」を持った「爺」という意味で、「国姓爺」を名乗ります。実はオランダの史料でも、「国姓爺」を表す「コクシン」や「コクシンハ」という単語が出てきます。ちなみに、鄭成功の呼称は、清朝側の文献で用いられています。

鄭芝龍が1646年に清朝に投降したとき、鄭成功は、父には従わず、隆武帝の後に擁立された永曆帝を支持します。この段階で鄭成功は、それまで鄭芝龍が持っていた制海権を引き継いで、本格的に海上貿易へと参加していきます。

彼は、1655年から南京の奪回を目指し、1658年には北伐を行いますが、失敗します。その後1660年に清が攻勢をかけると、鄭成功は、中国大陸部における支配地域の大半を失い、厦門と金門島を中心とする島々を持つだけになりました。

こうした背景もあって台湾へと目を向けた鄭成功は、オランダ東インド会社が持っていたゼーランディア城を1661年に攻撃し、翌1662年にこれを陥落させて、台湾を占領しました。また彼は、同じ年にマニラ遠征を計画し、この情報が漏れてマニラで華人虐殺が発生するということも起こりました。しかし鄭成功は、この1662年に急死します。

2-3. 鄭経時代以降

この後、息子の鄭経が鄭成功の後を継ぎます。鄭経は、1642年に鄭成功の長男として生まれ、厦門で育ちました。1662年に鄭成功が死去すると、彼は、厦門において後継を宣言します。

翌1663年、オランダ東インド会社が厦門や金門島を攻撃したのに伴い、鄭経は、1664年に拠点を台湾へ移します。その後、1673年に三藩の乱が発生すると、彼は、厦門の奪回を目指して三藩の側に参加し、一時的に厦門を中心に福建や広東の勢力圏を獲得しましたが、清朝の反攻に遭って1680年に台湾へと撤退し、1681年に死去しました。

この後は、息子である鄭克塽が後継者となりましたが、内紛が起こり、王国は弱体化していきます。こうした中で清朝の攻撃を受け、台湾鄭氏は、最終的に清朝に降伏します。以上が、鄭氏の歴史の簡単な流れであります。

では、その鄭氏は、どのように対外関係を展開し、貿易を行ったのか。ここから本題に入ります。

3. 台湾鄭氏の対外関係と貿易

3-1. 台湾鄭氏の貿易政策

まず、台湾鄭氏の貿易政策。こちらについては、上田先生が非常に詳細に論じていますので、それを使わせていただきました。

鄭氏政権は、自らは直接貿易には参加せず、政権が持つ「五大商」と呼ばれる商人組織の商人に資金を貸し付けて商売を行わせ、その利息を得て政権の財源としていました。「五大商」は、一つの組織が大体数十人で構成されて各地に存在し、貿易だけではなく諜報活動や工作活動も行っていました。

また、貿易において、鄭氏は、貿易船に渡航許可証である「牌」というものを持たせ、これを持たない、ないしその牌の有効期限が切れている船舶に対しては、その船を拿捕して貨物を没収していました。これはかなり頻繁にやっていたとのこと。このことが、中国沿岸で自由な航行や貿易を行いたいオランダ東インド会社と対立する要因となりました。但し、その一方でオランダ東インド会社も、東南アジアでは航行許可証を発行し、船舶に対してその提示を求めることをしていました。

3-2. 台湾鄭氏の貿易品と貿易の範囲

鄭氏の貿易が実際どのように展開していたのかについては、鄭維中先生の研究でかなり詳細に述べられていますので、こちらを使って説明していきます。

鄭氏は、まず中国の生糸と日本の銀との取引を、主たる貿易として展開させました。これに加えて、マニラを経由した銀の輸入にも携わっていきます。この背景には、中国における銀の需要と日本における絹、特に生糸の需要が高まったことがあり、まず鄭氏はこの貿易に目を付けて、貿易を展開していきました。

1640年代以降には、鹿皮の取引を通じて、南部ベトナムの広南阮氏、またカンボジアを経由した形でシャムとも貿易を行っていきます。また1640年代後半以降になると、今度はシャムとの直接の貿易を大規模に展開し、さらには北部ベトナムの陳氏政権とも貿易を展開していきます。

1650年代前半以降には、スマトラ島のパレンバンと貿易を行います。また、1660年代後半には、マレー半島の東岸にあるリゴールとも活発に貿易を行うようになります。

実はこの前段階として、1654年に鄭氏は、シャムなどに加えてカンボジアやリゴールにも一度自らの貿易船を派遣しています。そこで関係をつくった上で、この1660年代に大規模な貿易を展開していきました。

また台湾鄭氏は、1665年以降、特にカンボジアにおいて活発に貿易を展開しました。1667年には、カンボジアにあったオランダ東インド会社の商館を襲撃して、商館閉鎖へと追い込んでいます。

このカンボジアとリゴールについては、それぞれ貿易が拡大する背景がありました。まずカンボジアについては、台湾鄭氏とオランダ東インド会社が敵対していく状況で、シャムがオランダ東インド会社側につくということがあり、1665年以降、鄭氏配下の商人が広南やカンボジアへ逃れていきました。これによってカンボジアとの貿易が大きく展開します。また、リゴールに関しては、オランダ東インド会社がシャムへ向かう航路を封鎖した際に、リゴールがその迂回ルートとなる形で貿易が展開していました。

また、鄭氏が、台湾を占領する以前の1650年代に直接バタヴィアと貿易をしていたことも、明らかになっています。

あとは参考として、1661年と1663年に恐らくフィリピンを経由したルートでマルク諸島まで行った記述や、フィリピンの近くで蠟を手に入れたという記録もあります。台湾鄭氏は、こうした地域や海域でも活動していました。

以上のことから、鄭氏やその配下にあった華人は、1660年代まで、中国や日本、ベトナム、カンボジア、シャムなど東南アジアの大陸部、また、リゴールやパレンバンといった東南アジア島嶼部の一部で活動していました。

このような活動を通じて、鄭氏は、それまでの生糸と銀から、中国で需要が増大した胡椒、日本において需要が拡大した鹿皮などの貿易を展開していきます。またリゴールについては、錫の交易も行っていたことが記録されています。

4. 台湾鄭氏とジャワ島

4-1. 台湾鄭氏とバンテン

こうした形で1660年代まで島嶼部の一部で活動していた台湾鄭氏は、1670年以降、ジャワ島でも活動を展開していきます。

文献上では、まずバンテンにおいて、鄭氏の勢力が活発に活動を行うことがわかります。史料を紹介しながら見ていきます。

まず**史料1**。1670年の11月29日の記事です。ここで見えてくるのは、まず1670年の段階

史料 1 *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1670, p. 208. [29-11-1670]*

29日、スダダ海峡から総書記官の事務員である商務員ヨハネス・カンフイスが、ヤハト船パーペガイ号で再び戻り、表で見られる程に帰り船にふさわしく分配した貸借勘定と書簡の包みを携えていた。

これが行われ、帰り船がアンジュルの西方に然るべくあったのでバンテンに向かったところ、彼は停泊地にタイオワンから来た1隻のイギリスのスループ船を見つけた。これは、イギリスのヤハト船バンタム号が上述のスループ船と共に数か月前にこちらへ向けて出港して4~6週間とどまりここで商売をすることが認められているとの知らせを携えていた。我々の捕虜の解放は全く明らかでなく、話すことは死を以て厳しく禁止される。国姓爺の息子である鄭経が、マニラを彼の領地と支配とすべく翌年巨大な軍事力を以て同地を征服するとのうわさが流れる。バンテンの収税吏キアイ・ネベ・セクレダナによって台湾へ送られた数隻のジャンク船が、盗賊によってほぼ全て略奪された。しかし、国姓爺〔=鄭経〕の華人によって助けられ、タイオワンへと連れて行かれ、そこで非常に歓待され商売も認められた。即ちタイオワン沖である。更に上述のカンフイスは、スルタンが自らの労働者で新たな川に関しその存在で水路をより良くさせ続けていると話す。ヤハト船ボックス号は、今月22日のこちらを出航してバンテンの停泊地へと到着し、数日中に知事ウィレム・カーフの書簡を持って続く。

※ [] 部分は報告者補足

史料 2 *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1671, p. 273. [13-3-1671]*

バンテンから今日我々の元にジャワ人の船舶がやってきて、知事ウィレム・カーフによる昨日の日付で次のような内容の書簡が届いた。

〔中略〕

国姓爺華人のジャンク船がタイオワンからバンテンへやってきて、今月6日と同様に次のことを話す。約3ヶ月前に中国の沿岸で国姓爺のジャンク船によって5000〔点の〕金の小判が奪われたいし略奪された。同じく現在、バンテンに250人の乗組員と10トンの金と華人によって見積もられるものが到着した。〔そこには〕金の小判、スホイト銀、金、金糸、絹織物、種々の中国製の紙、その他小物類があった。同じ船で、若き国姓爺からバンテンのスルタンへ宛てた書簡も到着し、大きな場所を以て迎え入れられた。その内容は、華人やジャワ人の大官により記録され、知事は何も聞くことはできなかった。〔すなわち〕今到着した華人のうち3人が十分な資金を持ってレンバンへと出航し、そこで数隻の船舶を建造させる。そのうえで、定期的に多くの国姓爺の華人がバタヴィアや上述したジャワ東岸へと出航する。シャーバンドルであるカイツーは、1隻のジャンク船を台湾へ送る意図がある。というのも、前もってバタヴィアからの許可証を求めているからである。

※ [] 部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

史料3 *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1671, p. 298. [19-4-1671]*

夕刻、我々の元にジャワ人の船舶によって、バンテンにおける我々の知事であるウィレム・カーフの4月17日付の書簡が届き、〔以下の〕通知が含まれた。

〔中略〕

許可証担当の長であるオッケルスによれば、知事は、もし国姓爺がVOCと契約を結ぶことを望むのであれば、先ずは〔使者を〕派遣して先の不当な戦争で彼の元へと行った全ての捕虜と物を返さなければならず、その場合は、合意を行うために大使と完全なる委員団を派遣すると告げた。

※ 〔 〕 部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

史料4 *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1671, p. 298. [19-4-1671]*

シャーバンドル、カイツーは、スルタンの名で、停泊地にある国姓爺のジャンク船が、再び自由に台湾へと出航できるように求め、それとともに、その船とともに行ける〔＝航海できる〕よう許可証を求めた。しかし知事は、王の名前による後者は収税吏キアイ・ネベ・セクレダナとともにやって来る国姓爺の者達に商売をさせてしまうことになると確信している。

※ 〔 〕 部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

でバンテンから船を台湾へ送っていること。そして、盗賊、海賊に略奪された際に助けられたのが、鄭氏勢力の華人の船だったという事実。これらが、非常に重要と考えます。なお、この史料に出てくるタイオワンは、台湾の南方にある地を指します。台湾というのは台湾全体を指し、オランダ語史料では「フォルモサ」<Formosa>と表されます。

史料2。これは、1671年の3月の記述となります。ここのポイントは、まず鄭氏がバンテンへもたらした船の書簡を、バンテン側が大きな場所で非常に敬意を持って受け入れたという事実。また、そこで台湾から到着した華人のうち3人がさらにレンバンへ出航して同地で船を建造するという事実。その上で、今度はこの船を使って台湾からバタヴィア、バンテンへ出航させる意図を持っているという事実。そしてさらに、カイツーというシャーバンドルが、ジャンク船を台湾へ送る計画を持っていた事実。この4つが非常に重要です。なお、シャーバンドルは、「港務長官」と訳される東南アジアの港に存在した外国商船ならびに居留外国人の管理責任者ですが、さらに貿易を統括するというのも役割にあります。ここにあげたカイツーの行動は、後者と関連したものといえるでしょう。

史料3は、1671年4月のもので、台湾鄭氏の勢力がオランダ東インド会社と再び貿易を行いたいと考えているという記述です。会社の方は今のところは拒否していますが、条件が合えば、という形で対応をしています。なお史料にある許可証担当の長というのは、渡航許可証を担当する長と考えられます。文章を見ていくと、大体彼の名前が出てくるところで渡航の話が出てきますので、これは渡航許可証のことを言っていると思います。

史料3と同じ日に書かれた**史料4**は、**史料2**と関係します。オランダ東インド会社が、バンテンに台湾鄭氏の勢力が渡航して貿易を行うことを、非常に警戒していたことがわかります。

史料5 *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Aasserende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1671, p. 263-264. [26-2-1671]*

〔2月〕26日、我々のバンテン知事から昨日付の書簡を受け取る。〔それは〕今月21日に彼へ送り然るべく受け取られた書簡に対する返答である。即ち、バンテンにおいて我々のところで国姓爺のジャンク船が数日のうちに増えていることが明らかになっている。しかし、彼にはこの点に関して何も尋ねられておらず、何も語られていない。彼は、キアイ・アリアがバルスへの許可証を要求したことに対して、閣下の命に従って丁重に断った。

引き続き知事カーフは、〔以下のことを〕記す。今月22日日曜日、バンテンには、同地の収税吏キアイ・ネベ・セクレダナのジャンク船が、100名を超える国姓爺の華人と共に来航し、彼らの商品や手荷物も上陸した。さらにもう1隻、敵である国姓爺に属する約50ラスト級のジャンク船が、上述の収税吏とともに台湾を出航してグレシクまたはレンバンに向かい、そこでより大型のジャンク船を建造するないし入札する〔とされている〕。

※ □ 部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

バンテンについての最後は、**史料5** となります。1671年2月26日の記事で、バンテンのシャーバンダルらが実際にタイオワンに行き、タイオワンから鄭氏勢力の華人がかなりバンテンに来ている。また、台湾鄭氏はオランダ東インド会社との貿易を回復させようとしていたことがわかります。

バンテンについては、この華人シャーバンダルのカイツーと収税吏のネベ・セクレダナ、オランダ語文献ではそのように書かれている両者が、台湾鄭氏に関与しており、バンテン側の窓口となっていたようです。カイツーについては、オランダの史料に1656年から亡くなる1674年までシャーバンダルとして名前が現れています。

カイツーは、当時バンテン王国のスルタンであったアブドゥルファタ、坂井先生はティルタヤサと紹介していますが、このスルタンから高い信頼を得ていました。その大きな理由として、一つは、スペイン領マニラとの交易を通じてスペインリアルを入手して、王国の財政を安定させようとしたことがあります。また、ヨーロッパ式の貿易艦隊、いわゆる東インド会社といったヨーロッパの貿易会社のような形で、貿易艦隊の編成を行おうとしたことが、先行研究によって指摘されています。今回載せきれなかったのですが、1670年代にカイツーがレンバンで船を造らせて、それをイギリス式の外見となるように造りかえた話も出てきますので、やはりヨーロッパ式の貿易会社や艦隊をかなり意識していたのではないかと考えられます。このようなことから、まず1670年代に、バンテンと同地における鄭氏の活動との関係が見えてきます。

4-2. 台湾鄭氏とジャワ北岸地域

一方、ジャワの北岸地域においても、1671年と1672年に台湾鄭氏の勢力が活動していました。この両年、スマラン、ジュパラ、ジュワナ、レンバン、グレシクといったジャワ北岸地域、中部から東部のジャワ北岸地域で鄭氏の船舶が頻繁に航行している記録が残されています。鄭氏を警戒しているオランダが、グレシクの華人に対して、現地で船を航行させている鄭氏の動きについて報告を依頼するといった記述も出てきます。

また、特に北岸地域では、船舶の建造に鄭氏が関わっていたことが明らかになっています。

史料6 は1671年の記述になります。パジャンクンガンで船舶が建造されて、それを鄭氏

史料6 VOC 1283, f.1351. [22-3-1671]

レンバン湾のパジャンクンガンでは、バンテンのシャーバンドルであるカイツーが持つ大きさ約70コヤンのジャンクが建造され、それを彼は国姓爺の華人に売る。今月10日からパジャンクンガンにある上述の人物が所有するジャンクは、カイツーがより確実に航行することができるよう閣下の許可証を得る意向を持って所有している。というのは、上述のカイツーがそれを得られるか多少疑わしいからである。

※文中の国姓爺は、鄭経を指す

史料7 VOC 1290, f.143 [12-4-1672]

レンバン湾には7隻のワンカン船がある。うち、パジャンクンガンの2隻はシャーバンドルであるライツーンが所有し、それぞれ長さは約20尋で非常に頑丈に造られている。ランギンナンには2隻の同型船があり、長さは17尋で日本人が所有する。さらに〔長さ〕11尋と14尋の同型船があつて、国姓爺の華人が所有すると言われている。しかし後に、その代金が値切られて販売されるとの噂が広まった。だが、我々に知られるところでは、閣下の命令により合わせられるようにこの噂は消される。こうしてこの船ないし2隻の船は3週間以内に進水することになる。

※〔 〕部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

史料8 VOC 1290, f.155 [23-7-1672]

グレンクのアイシャが所有するジャンクがジュワナの川の中にある。彼は、それから様々な華人に販売する。しかし買い手は、それが国姓爺によって建造され、そのことを我々が知っているのので、あえて落札することはしない。信頼できる者は、塩水や虫〔の影響〕を少なくする賢いコースを取る。

※〔 〕部分は報告者補足

また、文中の国姓爺は、鄭経を指す

史料9 VOC 1290, f.152 [24-6-1672]

今月7日、レンバンから数人の華人がやってきて、ヤハト船ホーヘランド号が台湾の華人が所有するジャンクを傷つけ、彼らが言うには3ないし4人の華人とジャワ人1人が我々によって殺された。それが実際どうだったのか、閣下〔の者〕は機会があれば進んで聞くことを願って出発する。恐らくは、乱れた華人によって不安を掻き立てられ、我々は習慣的に分別がないとジャワ人によって扇動された。というのは、我々は彼らにより良い方法(?) <soudament>を答えるからだ。

※〔 〕部分は報告者補足

史料10 VOC 1283, f.1354 [9-4-1671]

小生から閣下へ宛てた去る3月25日付自由市民マート・レーウによるもの〔=書簡〕からの副本。その間に何も新しいことは起こっていない。現在、台湾の華人がスマランやグレンクとあちこちに居住し始めている。しかし、それにもかかわらず、パジャンクンガンでのジャンク船の建造は進んでいる。

※〔 〕部分は報告者補足

の華人に売るという意図がここで見えてきます。

翌年に書かれた**史料7**も、鄭氏の華人の船が建造される話です。

その次の**史料8**は、船を販売しようとしても、国姓爺によって造られた船だと知っているの、警戒感を持って買わない人もいるという内容です。

史料9は、北岸地域を航行する鄭氏の船を攻撃するという記述です。非常に伝わりにくい文章で申し訳ないですが。

史料10は、鄭氏の華人が北岸地域にも来ているという記事です。1671年4月の記事で、現在、タイオワンの華人がスマランやグレシクとあちこちに居住し始めている。鄭氏の移住はかなり進んでおり、さらに増やすようなこともしている、ということです。

4-3. 台湾鄭氏とジャワ島

史料を細かく見ていくと、ジャワ島において台湾鄭氏の活動が顕著になるのは、1670年以降です。このうちバンテンについては、1660年代以降、同王国の船がシャムや広南、トンキン、中国沿岸で航海を行い、許可証を求めるといった動きをしていました。こうした中でバンテンは、渡航先で台湾鄭氏の勢力と接触して、互いに関係を深化させていったのではないのでしょうか。

5. 鄭氏の活動の背景とオランダ東インド会社

5-1. 鄭氏の活動の背景

ここまでジャワ島で活発に活動した鄭氏の動きについて見てきました。次に、ジャワ島において鄭氏が活動した背景や、それに対するオランダ東インド会社の対応、ならびにその要因について考えていきます。

鄭氏による活動の背景にあるものとして、1656年に海禁令、また1661年には遷海令を発令した清朝が、他方でポルトガル領マカオに対しては比較的寛容であったために、同地を通じて商業活動を行えたことが、鄭維中によって指摘されています。このこと加えて、ブリュッセイ<Blussé>が、著書*Strange Company*において、1650年代後半から1660年代にバタヴィアへ来航した華人の多くがポルトガル領マカオから渡航してきたと説明しています。こうしたマカオを経由して貿易や渡航を行った華人の中に、鄭氏やその配下の者も存在していたと考えられます。

また1670年代ごろから、当局が黙認する形で遷海令が事実上解除され、清朝側から見ると密貿易となる貿易が、ポルトガル領マカオを中心に常態化していました。このことで、鄭氏は非常に活動しやすくなった反面、鄭氏以外にも密貿易に従事する商人が多数現れたために、両者の間で競争が発生することになります。

こうした中で、これまで利益を得ていた貿易に加えて、さらに新しいものに目を付けよ

	ジュパラ行磁器	グレシク行磁器	ジュパラ行銅	グレシク行銅
1636	金額不明			
1637		金額不明		
1661	10			
1663	95	155	22	
1664	182	72.5		
1665	10			
1666	12.5	63		
1667	284	46		
1668	167	68	330	226
1669	197	76	506	50
1670	16	140	1180	240
1671	30	66	4480	360
1672			1200	3125
1673	260	380	1072	432
1674	236	321	3168	128
1675	9	289	2654	140
1676	38	320		1000
1677	307	449	88	240
1678	353	189	420	
1679	136	34		
1680	20			
1681	2	33		

表 バタヴィア発ジュパラ・グレシク行貿易額
〔非VOC船舶分〕 単位：レイクスダールデル

Dagh-register Batavia より作成

うということで、鄭氏はジャワ島に注目したのではないかと考えました。もともと陶磁貿易をやっていますが、さらに貿易を大きく展開させようとしたところでジャワ島に着目したのではないかと考えました。

その貿易先の事情ですが、例えばバンテン王国は、アブドゥル・カディルとアブドゥルファタ・アグンの時代に全盛期を迎え、特に後者は、南スマトラや西ジャワ内陸における胡椒の栽培や貿易を掌握し、さらにこれを拡大させていました。そうした中で、ギオー<Guillot>の指摘によれば、アブドゥルファタ・アグンは、1655年に、バンテン、アチュ、ジョホール、マタラム、マカッサルで構成される反オランダのイスラーム王国同盟を企図していたとのこと。彼は、反オランダ東インド会社という意図を非常に強く持っていました。

また、バンテンにはイギリス商館が置かれており、イギリスはここを拠点として活発に貿易活動を行っていました。オランダ側の史料にも、イギリス船がバンテンを拠点に各地で貿易を行っていたという記述を見ることができます。

一方、ジャワ北岸地域。もともとジャワ北岸地域は、香辛料の中継貿易により17世紀初頭まで繁栄していました。しかしその後、内陸から勢力を拡大したマタラム王国が、この地域を征服して支配することになります。こうして北岸地域の貿易はしばらく停滞するのですが、17世紀中葉以降にマタラム王国がオランダ東インド会社に対して貿易を活発に展開させると、ジャワ北岸地域も、香辛料の中継から米や木材、船舶、砂糖の輸出へと転換して、貿易を拡大させていきました。また、こうしたマタラム王国とオランダ東インド会社との貿易には、華人が大きく関わっていました。

表はバタヴィアから北岸地域、中部ジャワのジュパラと、東部ジャワのグレシクへ送られた貿易品の額を示したものです。ジュパラは、マタラム王国のいわゆる外港としての役割を果たしていたところ。グレシクは、マタラムの支配下に入ったものの、ジュパラと比べるとそれほど強い王国の庇護がないところです。この二つを見ますと、陶磁器、特に磁器の輸出額はそれほど大きくない一方で、銅、すなわち日本の銅はかなりの額が輸出されています。こうした鄭氏が関わっていた可能性が高い日本とも関係する貿易が展開されていたことから、ジャワ島には、鄭氏が1670年以降に貿易を行うことが可能な基盤が既にあったのではないかと考えます。

5-2. オランダ東インド会社の対応

このような鄭氏の活動に対するオランダ東インド会社の対応ですが、両者は、台湾周辺や中国沿岸において激しく対立していました。鄭氏は、1657年に彼らの船舶の活動を妨害しないという要求を会社に対して半ば強制的に受け入れさせ、1662年には台湾を占領します。これに対してオランダ東インド会社は、清朝と関係を結んで、1663年に厦門や金門島を攻撃するなど、軍事的行動を鄭氏に対して行いました。

しかしながら、ジャワ島周辺においてオランダ東インド会社は、鄭氏を非常に強く警戒しながらも、**史料9**にある3人を殺害した台湾の華人ジャンク船襲撃ぐらいしか軍事的行動を行っていません。

これは何故かというのは、推測の域になってしまいますが、まずジャワ島周辺では、どちらかというオランダ東インド会社の方が制海権を持っていて、バタヴィア政庁や各地の商館がパス〔航行許可証〕を発行しており、それに鄭氏も乗っていたので、あからさまな両者の対立はなかったことが考えられます。

また、オランダ東インド会社が、バンテン、バタヴィア、ジャワ北岸地域での貿易、特に後二者において華人に多くを依存していたことも、理由の一つとなると思います。

あと、これは元々台湾の研究者による説で、坂井先生の研究からの孫引きになるのですが、1670年にイギリスが鄭氏との間で軍事的要素も持つ通商協定を締結したことで、鄭氏

のバックにイギリスが付いてしまった、ということがあります。オランダは、その直前にマカッサル戦争などで大規模に軍事的活動を展開させていたので、余裕のある状況ではなかった。そのため、オランダ東インド会社は、ジャワにおける鄭氏の活動について、警戒しながらも軍事的には手を出せなかった。その段階で、半ば鄭氏の活動を黙認せざるを得なかったのではないかと考えられます。

6. まとめ

最後にもう一度、整理してまとめたものを申し上げます。17世紀前半に台頭した鄭氏勢力、後の台湾鄭氏は、中国－日本間から貿易の範囲を東南アジア各地へと拡大し、現地で活発に活動するようになった。こうした鄭氏の活動は、ジャワ島では1670年以降に顕著となります。

その背景として、中国沿岸については、元々遷海令の取り締まりがマカオにおいてそれほど厳しくなかったことに加え、1670年代以降には黙認という形で遷界令が事実上解除される状況となり、密貿易が常態化していったことがあります。また、東南アジア海域、特にジャワ島では、バンテンやジャワ北岸地域における貿易活性化に、華人が重要な役割を果たしていたことが背景としてありました。

こうした鄭氏の活動に対して、オランダ東インド会社は、台湾や中国沿岸では彼らと激しく対立しましたが、しかし、ジャワ島では、貿易の多くを華人に依存していたことや、鄭氏－イギリス間の条約によってイギリスが彼らのバックについたことから、この段階では鄭氏の活動を半ば黙認せざるを得なかったと考えました。以上となります。

質疑応答

フロアA：三点質問があります。一つ目は、鄭氏がVOCと貿易の条約を結ぼうとする動きがあると紹介されましたが、そのときに何か「元の状態に戻す」というような表現が使われていました。その鄭氏とVOCが平和的に貿易をやっていた元の時期はいつ頃のことなのか、教えていただければと思います。

それから二点目、造船に関わる話についてです。まず**史料8**の解釈。ここで鄭氏の勢力が造った船は、みんな買わないというような、そういう史料でしたね。これで何か、塩水や虫の対策が不十分みたいなことが書かれていると思うのですが、これはつまり、当時の台湾、タイワンが中国の沿岸の、この時期では中国沿岸の造船技術よりも、このインドネシア、ジャワ島北部の造船技術の方が進んでいたというか、新しい段階になっていたのか。そういうことが読み取れるのかどうかということです。

最後に、鄭氏がこの時期に造船するということ。当時、ジャンク船の耐用年数が大体20～30年といわれています。船を造り替えなければいけないということは、やはり鄭氏が中国沿岸でそれ以前に使用していた船が、そろそろみんな耐用年数が切れてくるという問題も考えなければならないように思いました。これらについて、お願いします。

久礼：恐らく元の状態というのは、台湾占領以前のことを指すのではないかと思います。ただ、史料的にまだ全然裏付けをとれていないので、何とも言えないところがあります。これはあくまで推測ということでよろしくお願いします。

次に、塩水や虫のところ。説明していませんでしたが、造船とか木材は、現地の華人が中国式の方法でやっています。買わなかった理由は、鄭氏が造った船だからなのではないかと、今のところは考えています。虫とか塩の影響への対策は、恐らく現地人よりも中国人の方が技術は高かったのではないかと考えています。実際に造船をやっていたのは華人がほぼ全てですので、そちらの方が高かったのではないかと考えています。

最後のご指摘は、私もいただいて非常に納得したところがあります。なぜこの時期に鄭氏が、船を求めてジャワに来るのか。私も、このことをずっと考えていました。1670年代当時、ジャワ島のパジャンクガンやレンバンは、非常に多くの木材を出し、なおかつ造船の技術が最も高かった。このため、多くの船を造りかえる必要が生じた一方で中国では造船が難しくなったこの時期において、代わりとなる造船地として最も適していたのがこのパジャンクガンやレンバンであった。こうした中で、鄭氏もここに目を付け、ここで造ったのではないかと。耐用年数という考えは、まさにしっくりくる場所がありました。これは参考にさせていただきたいと思います。

参考文献

[未公刊史料]

(1) オランダ語

Nationale Archief, The Hague
Archief van de VOC
no. 1283, 1290

[公刊史料]

(1) オランダ語

Coolhaas, W. Ph. (ed.) (1960-) *Generale Missiven van Gouverneurs-generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*. 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Department van Kolonien (1887-1931) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Passerende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India*. 31 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Jonge, J. K. J. de (ed.) (1862-1888) *De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie*. 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

(2) 日本語訳

村上直次郎 訳注、中村孝志 校注 (1975) 『バタヴィア城日誌』1-3 (東洋文庫271) 平凡社
フーンズ、ファン、フリート、ファン、コイエット、フレデリク、生田滋 訳注 (1988) 『オランダ東インド会社と東南アジア』(大航海時代叢書Ⅱ-11) 岩波書店

[二次文献]

(1) ヨーロッパ語文献

Blussé, L. (1988) *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*. Dordrecht: Foris Publications.

Bulbeck, D. (1998) *Southeast Asian Exports since the 14th Century: Cloves, Pepper, Coffee, and Sugar*, Leiden: KITLV Press.

Campbell, Rev. Wm. (1967) *Formosa under the Dutch*. Taipei: Ch'eng-Wen Publishing Company.

Cheng Wei-chung (2013) *War, Trade and Piracy in the China Seas 1622-1683. TANAP Monographs on the History of Asian-European Interaction* vol. 16. Leiden: Brill.

Gaastra, F. S. (2002) *De Geschiedenis van de VOC*. 5th edition. Zutphen: Walburg Pers.

Glamann, K. (1958) *Dutch-Asiatic Trade: 1620-1740*, Copenhagen, The Hague: Danish Science Press.

Guillot, C. (1990) *The Sultanate of Banten*. Jakarta: Gramedia.

Houben, V. J. H. (1994) "Trade and State Formation in Central Java 17th-19th century", Schutte, G. J. (ed.) *State and Trade in the Indonesian Archipelago*. Leiden: KITLV Press.

Leur, J. C. van (1955) *Indonesian Trade and Society: Essays in Asian Social and Economic History*. The Hague: Bandung, W. van Hoeve.

Li Tana, (1998), *Nguyễn Cochinchina: Southern Vietnam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Ithaca, New York: Cornell Southeast Asia Program Publications.

Purcell, V. (1980) *The Chinese in Southeast Asia*. 2nd edition. Kua Lumpur: Oxford University Press.

Reid, A. (1988, 1993) *Sotheast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. 2 vols. New Haven and London: Yale University Press.

- (ed.) (1993) *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade Power and Belief*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Ricklefs, M. C. (2008) *A History of Modern Indonesia since c. 1200*. 4th edition. Stanford, California: Stanford University Press.
- Volker, T. (1954) *Porcelain and the Dutch East India Company: As Recorded in the Dagh-Registers of Batavia Castle, Those of Hirado and Deshima and Other Contemporary Papers 1602-1682*. Leiden: E. J. Brill.
- Wills, J. (1974) *Pepper, Guns and Parleys: The Dutch East India Company and China 1622-1681*. Cambridge and Massachusetts: Harvard University Press.
- (1976) "De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia", M. A. P. Meilink-Roelofs (ed.) *De VOC in Azië*. Bussum: Fibula-Van Dishoeck.

(2) インドネシア語文献

- Rantoandro, G. (1999) "Kiyai Ngabehi Kaytsu di Banten Syahbandar dan Perantara", Chambert-Loirm H. and Hasan Muarif Ambariy (ed.) *Panggung Sejarah: Persembahan Kepada Prof. Dr. Denys Lombard*. Jakarta: Ecole française d'Extrême-Orient; Pusat Penelitian Arkeologi Nasional; Yayasan Obor Indonesia.

(3) 日本語文献

- ダニエルス, クリスチャン (1984) 「清代台湾南部における製糖業の構造—とくに一八六〇年以前を中心として」 『台湾近現代史研究』 第5号
- 林田芳雄 (2003) 『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実記』 (汲古選書 37) 汲古書院
- 弘末雅士 (1999) 「交易の時代と近世国家の成立」 池端雪浦 (編) 『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』 (世界各国史6) pp.82-137 山川出版社
- (1999) 「東南アジアの港市国家と後背地」 佐藤次高、岸本美緒 編 『市場の地域史』 (地域の世界史9) pp.92-126 山川出版社
- (2004) 『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序—』 (世界歴史選書) 岩波書店
- 久礼克季 (2013) 『17世紀ジャワ北岸地域の華人』 立教大学博士論文
- 永積昭 (2000) 『オランダ東インド会社』 (講談社学術文庫) 講談社
- 永積洋子 (1999) 「東西交易の中継地台湾の盛衰」 佐藤次高、岸本美緒編 『市場の地域史』 (地域の世界史9) pp.326-366 山川出版社
- 大橋康二、坂井隆 (1994) 『アジアの海と伊万里』 新人物往来社
- 坂井隆 (1993) 「肥前陶磁の輸出と鄭氏」 『東南アジア歴史と文化』 22 pp. 67-94
- (1998) 『「伊万里」からアジアが見える』 (講談社選書メチエ) 講談社
- (2002) 『港市国家バンテンと陶磁貿易』 同成社
- 斯波義信 (1995) 『華僑』 (岩波新書 382) 岩波書店
- 鈴木恒之 (1999) 「近世国家の展開」 池端雪浦編 『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』 (世界各国史6) pp.138-181 山川出版社
- (1998) 「東南アジアの港市国家」 横山紘一、川北稔、岸本美緒、斎藤修、杉山正明、鶴間和幸、福井憲彦、古田元夫、木村凌二、山内正之 編 『岩波講座世界歴史 13—東アジア・東南アジア伝統世界の形成—16-18世紀』 pp. 193-214 岩波書店
- (2001) 「オランダ東インド会社の覇権」 石井米雄 編 『岩波講座東南アジア史 3—東南アジア近世の成立—』 pp. 95-120 岩波書店

- 鄭維中、郭陽 訳 (2013) 「清朝の台湾征服とオランダ東インド会社—施琅の「台湾返還」密議をめぐって—」 中島楽章 編『南蛮・紅毛・唐人』 pp. 319-365 思文閣出版
- 上田信 (2005) 『海と帝国—明清時代—』(中国の歴史 9) 講談社
- (2013) 『シナ海域蜃気楼王国の興亡』 講談社
- 八百啓介 (1998) 『近世オランダ貿易と鎖国』 吉川弘文館